
病みつきなのは～後日談～

黽b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病みつきなのは～後日談～

【NZコード】

N5451V

【作者名】

勲b

【あらすじ】

病みつきシリーズ第二弾！！

作者が調子に乗って書いてみた病みつきなのはの続編です

前作を呼んだ後読むのをお勧めします

オリ主×なのはです

キャラの口調に違和感があると思います

好評価を記念して、選ばれなかつた選択肢を書きました

(前書き)

作者が調子に乗って書いてみた病みつきなのはの続編です。

少しでも多くの方に楽しんで頂いたら光栄です

機動六課が解散した

もともと1年で解散する予定だったため驚く事じゃない。

あれから、俺となのはさんは会つてない。

向こうは管理局のHースで俺はただの凡人なんだ、簡単にあえるわけが無い。

…会いたくも無いけど

なのはさんはから来たメールは返すようにしてる。前みたいな事になるのは嫌だからだ。

「大丈夫？」

声が聞こえた方を見ると、そこには心配そうな顔で俺を見ているフェイトさんと田が合つ。

「もうすぐこの事件も終わるから、それまで一緒に頑張る」

… そう笑顔で言われたら頑張るしかない

フェイトさんが言つていたが俺は今とある事件を解決させるため大型ビルの中にいる。

3つの班に別れて行動しておりその一つが俺とフェイトさんだ。

「他の班は5人ぐらい入るのに…まあ、フェイトさんがいれば大丈夫だろう。」

「そうですね。この事件もこれで終わるでしょうですし、頑張りましょう」

そう笑いながら俺も言う。

フェイトさんはそれを聞き、嬉しそうに笑いながら進んでいく。

しばらく歩いたあと、1つの扉の前に着く

「ティアナ達はもう侵入したらしく、私達も急げ」

そういうと、フェイトは扉の中に入っていく。

少年はフェイトに付いていきながらもある事を思い出す。

それは、ティアナと別れる前の事

あの日なのはにされたことそして、それからの少年となのはの事

今でも少年はなのはには逆らえない。

逆らえばなのはがどんな行動をするか少年は理解出来ないからだ。

「ガジェットが来てるみたい」

前の方から人型のガジェットの大群が来ている。

フェイトはそれを確認するとガジェットの大群に突っ込む。

「サポートお願ひ……」

フェイトは少年にそれを言つと、ガジェットを次々に破壊していく。フェイトが破壊しきれなかつたガジェットや後ろから狙うガジェットにはナイフが刺さり、そのナイフは爆発する。

「わかりました、援護は任せください！」

そう言つと少年の手には青色の魔力で作つたナイフで次々にガジェットを倒していく。そう言つと少年の手には青色の魔力で作つたナイフで次々にガジェットを倒していく

――――――

少年が指を鳴らすと最後のガジェットに刺さつていたナイフが爆発する。

「これで最後だね」

フェイトは周りを警戒しながら少年に言つ。

「そうみたいですね。これでティアナ達が少しでも楽になればいいんですけど……」

少年とフェイトはこの作戦では陽動とそれに釣られたガジェットの破壊なので後はティアナからの連絡を待つ事しか出来ないのだ。

・・・結構な数がいたな

少年は周りに広がるガジェットの残骸を見ながら先ほどの戦いを思

い出す。

「ティアナから連絡が来たよ。無事に捕まえたって
フェイトは嬉しそうに笑いながら少年に報告すると直ぐにティアナ
との連絡に戻る。

「…じゃあ、そろそろ戻ろっか」

連絡が終わりそのまま来た道を戻るフェイトさんに着いていくよう
に少年も戻っていく。

… はあ、戻つたら報告書か…

管理局に戻つてきた少年とフェイトは管理局内にあるカフェに向か
つた。

「はい。コーヒーでいいですよね」

先に座つていたフェイトの前にコーヒーが入つたカップを渡す。

フェイトは少年に礼を言つとそれを受け取る。

「事件も終わつたし、もつ戻るの?」

「いえ、今日はもつ来なくていいと先ほど連絡が來たので今日は久
々に家に帰るつもりです」

少年が所属している課は他の課の事件に対して必要な人材を派遣す

るのが仕事のため他の課の人達以上にミットにいる事が少ないためなかなか家に帰る機械が無いため久々に家に帰れるため少年は嬉しそうだ。

「といつても、明日迄に報告書を書かないといけないんですけどね」

「そつか、私は休憩が終わるまで時間があるから一緒に話さない？ ティアナ以外の六課の人と会うのは久しぶりなんだ」

「いいですよ、俺も今日は時間がありますし」

フェイトは少年の返事を聞くと嬉しそうに笑いながら六課の話をす
る。

少年も過去を振り返りながらそれに応える。

「…あ、もう時間だ。じゃあ、今度のパーティーで会おうね
「待ってください」

フェイトの言葉に対して即返事を返す少年、それに対して不思議そ
うな顔をするフェイト。

だが、少年の返事の意味がわかつたのか悲しそうな顔になる。

「もしかして、来ないの？六課のメンバー殆ど来るんだよ？」

…いや、といふか

「パーティーって何ですか？俺は何も聞いてないんですが…？」

「ふえ？」こないだ私がちゃんと伝えたか、伝えてないかを思い出す。

…やっぱり聞いた覚えが無い

「わ、忘れてた…」云々云々としたら事件が進展してタイミングを逃してたんだつた…！」

少年は呆れたように目の前であわてていろいろフェイトを見ながら推測する。

…パーティーには六課のメンバーが殆ど来るらしいといつ事はなのはさんが来てもおかしくはない

少年がフェイトに對して質問をしようとする前にフェイトが口を開く。

「あ、なのは…」…え？

少年は恐る恐る振づ向くとやにこには二口二口と嬉しそうな笑顔の高町なのはがいた。

「2人とも久しぶりだね」

なのははそのままフェイトの隣に座る。

…何でこんなと…・・・いや、此処は管理局だし居てもおかしくない。油断してた。

何時もなら少し離れたところで、会つ確率が低いのですから。

少年は自分の油断に後悔しているとフロイトが立ち上がる。

「せつかくのまとい会えたから話でもしたいけど私そろそろ時間だから行くね」

「そつか。せつかフロイトちゃんに会えたのに残念だなー」

「今度のパーティーで会えるよ」

「じゃあね、とフロイトは少年とのまて手を振りながら自分の仕事場へと向かっていった。

それをなのは手を振り返して見送り、少年はただ俯きながらこれからを考える。

「じ、じやあ俺も仕事があるんで、これで

少年は流れにのじの場を立ち去る。がなのはに手を握まる。

「君は今日は休み何でしょ」

「えー? 何でそれを

・・・俺だつてさつき知った話だしその話をしてた時はなのはさんは居なかつたはずだ。

ならなんで?

「君の隊長さんから話を聞いてきたんだーだから今日は君が休みて事は知つてゐし、君が今まで何をやつてきたかも知つてゐるよ

少年の聞きたい事がわかつたのかなのはは先回つていつわ。
光りがない濁つた目で少年を見つめながら、少年の言いたいことが
全てわかつてゐるかのよう。

「何をやつてきたかも知つてゐて…流れに聞こ過ぎじやないですか？」

「そんな事無いよ。何時も隊長さんから話を聞こてるんだから」

「何時も！？何でそんな事…」
「好きだからだよ。君のことが大好きなの。つづん、そんな感じ
ない愛してゐる、君の事を誰よりも」

なのはは頬を紅く染めながら、だがはつきりと語る。それを聞いて
いた周りの人達が騒めきだす。
フェイントなのはがいた時点でかなりうるさかつたが今はその時以
上だ。

対する言われた少年は顔を真つ赤にするのでもなく困つた表情を浮
かべるのでもなく、ただ俯くだけ。
強いて言つなら顔が少し青くなつた位だ。

「そろそろ時間だから私も行くね

ずっと俯いてゐる少年に向も言わずに立ちはだか。

「それとパーティーのことだなど心にしていいよ。隊長さんには前
もつて言つていたから。ちやんと休みになつてゐるはずだよ」

だからとなのはは続ける。俯いてるだけの少年が当口逃げなこよつに、自分が本当に隊長と話してることを証明するよつ。

「ちゃんと来てね。… 来ないと私——」

「——どうなつちやうかわからなかり」

それだけ言つてなのはは去つていく。

それを聞き少年は顔を上げるとすぐに自分の隊長に連絡をするため場所を離れる。

野次馬が多過ぎてまともに連絡も出来ないからだ。

連絡した結果、パーティー当口は休みらしい。

理由は単純に管理局のヒースに頼まれたからとえられた。

いや、少年からすればそんなものどうでもいい。

ただ、最後のなのはの言葉これが問題なのだ。

行かなければどうなるかなんて考えたくないし、考えれない。

なのはがどんな行動をするかわからないからだ。

もしかしたら自殺かもしね。

もしかしたら俺を殺すかもしね。

そんなありえなさそなことを考えてはただ震えるだけ… それだけの毎日を過ぐしてパーティーの日になつた。

パーティー会場の近くにある公園にのベンチに少年は座つてゐる。隊長が管理局のヒースからと言われ、渡された1枚の招待状を手にしながらそれを見つめる。

場所はここからなら歩いて3分もかからない場所であり時間はまだ1時間も余裕がある。

・・・コレなら流石に遅刻はしないだろ。」

少年は右にある建物を見る周りのビル群よりも高く、目立つ建物。この建物はホテルであり、その最上階にあるで今日のパーティーは行われる。

…こんな格好でいいかな?

今の少年はスースを着ている。

初めは管理局の制服か私服か迷つたが招待状にはしっかりとした服装で来ることと書かれていたためこいつなつた。

1人で大きめなため息をしながら、空を見上げると綺麗な星空が見える。

…まあ、どうでもいいけど

「空に何かあるのか?」

少年が現実逃避に近いことをしてると声をかけられた。

初めは他の誰かかと思つたがこの公園には少年しかいないためその可能性はない。

少年が声のした方を向くとシグナムとヒリオとキャロがいた。

「「「んばんはシグナムさん、ヒリオ、キャロ」

「「「んばんは」」

少年の挨拶にエリオとキャロは仲良しく声を揃えて応える。

「会場に向かわなくてもいいのか？」

「まあ、時間もありますしね。シグナムさんほどひして2人といふんですか？」

「我が家主に頼まれたのでな」

シグナムの質問に少年が応えると今度はキャロが少年に話しかける。

「久しぶりですね。元気でしたか？」

「まあ、元気かな。キャロは……元気そうで何よりだよ
嬉しそうに笑いながら聞くキャロも少年は応える。

……やっぱ子供は苦手だ

そんな少年の思いを余所にエリオが少年に話しかける。

「何時もの管理局の制服もいいですけどスースイ姿も格好いいですね

「エリオも似合つてるよ

服装に自信が無かった少年からすれば社交辞令とはいへ安心するものがある。

「そういうえば、何でフェイントさんじゃなくてシグナムさんが迎えに行つたんですか？」

「む……私では何か不満でも有るのか？」

「いえ、ただ気になつただけです」

「…テスタークサは少し遅れてくるらしいからな。その代わりに私が迎えに行つたのだ」

「相変わらず仕事熱心な人だ

「お疲れさまです」

「ふつ、これぐらいたやすこさ」

「…迎えに行くだけで大変な人なんているのか？」

「では、そろそろ行くとしよう」

「では、また後で」

少年が手を振りながら言つと3人はキョトンとする。

「何言つてるんですか？一緒に行きましょうよ」

キヤロが少年に近付きながら言つ。

「そうですよ。階で行きましょうよ」

エリオが少年に近付きながら言つ。

「む・・・そりいえばお前とは余り模擬戦をしてなかつたな」

「さあ、目的地も近いし早く行こうか

シグナムが何か言いだす前にパーティー会場に逃げるため近づいてきた2人の手を握りながらパーティー会場に向かうこととした少年。

「今日は凄く疲れそうだ

――――――

パーティー会場内では既に沢山の人で賑わっていた。
「まだ始まつてないのに沢山来てますね」

「それだけ皆楽しみだつたつて事だらうな」

エリオが回りの人を見ながら呟いた言葉に少年は返事をする。

「…にして多過ぎないか？半分近くの人ができる気がする」

「それだけ皆楽しみだつたんですよ」

少年の呟きにキャロが応える

「…まあそうなのかも知れないな。
でも、これだけ人がいると探すのに時間が掛かるな。」

「どうかしたんですか？」

「いや、大丈夫だよ」

「でも、さつきから周りを見渡してばかりじゃないですか」

「懐かしい人ばかりだなって思つてね」

「そうですね、解散したあとそれつきりって人達も多いですね」

…まあ、本当は会いたくない人達を探してるんだけど。

少年が会いたくない人達というのはなのはとティアナの2人である。最悪でも2人同時に見つかるなんてことは無いようにしないと思い少年は周りを見渡している。

…今のところは2人もいののか？
それとも俺が見つけてないだけなのか…

「あっ、フェイトさんだ！！」

キヤロが指差した方向には、2人を探してるのか周りを見渡しているフェイトさんがいた。

少年がそれを見ると2人と結んでいた手を離す。

2人は少年に礼を言うとそのままフェイトさんの方へと走つて行った。

…さて、これからどうするか。

まあ、そろそろ始まる時間だしそこに居ればいいか。

少年は近くの壁にもたれながら入り口を見つめる。
まだまだ人は来るらしい。

「えー、この度は六課の皆集まってくれて本当にありがとうございます」

「まあ、堅つ苦しいのは無にして皆で盛り上がるつかーー！」

六課の部隊長ということもあり、始まりの挨拶ははやてさんが行つ

た。

… といったも皆挨拶無しでも盛り上がりをもつていたため余り意味は無かったと思つ。

パーティー会場の入り口は既に人の出入りが無くなりかけておりそれはもう殆んどの人が来たことを示している。

少年は既になのはとティアナの場所を把握しているため後は会わないように場所を調整すればいいだけだ。

「あつ、見つけた。探したんだよ」

少年に声を掛けってきたのはフェイトだった。

「探した? 何か用事でも」

「うーん、用事と言つより私が君と話したいから探したの…迷惑だつたかな?」

「そんな事無いですよ」

少年の顔を伺うように上目遣いで言うフェイトにたいし少年はフェイトを安心させるためにも笑顔で言つ。

「キャロとHリオの相手をしてくれてありがとう」

「礼を言われるような事じや無いですよ」 「2人は何処に行つたんですか?」

「Hリオとキャロの」と、その2人ならスバルとティアナと話していくつて言つてたよ」

「… そうですか」

「2人とも喜んでたよ。久しぶりにFWのメンバーと会えるんだーつて」

「全員揃いのまうなこと思つてたんでしょうね。そういうばつヒートさん意外と来るの早かつたんですね」

「うん。仕事が早く終わつたから急いできたの」

「それはよかつたですね」

「ん?… 少し待つといで下せこ」

少年がフェイトに面つてテーブルに置いてあつたグラスにワインを注ぐ。

「どうぞ」

「ありがとう。でも、君は飲んじゃ駄目だよ、まだ未成年だから」

フェイトは差し出されたグラスを受け取りながら自分の分を用意している少年に注意する。

「… うう、今回だけだよ」

フェイトの反応を楽しみながらも少年は2人の居場所を確認する。

ティアナは俺を抜いたFWのメンバーとなのはははやてと話していく

るのを確認する。

「ティアナはともかくなのはさんが話しあげて来ない……？いや、今回の一泊一食の日を休みにしてくれたのも善意なのか……？いや、それは無い……と思つ

「どうかした？」

「え！？いや、何でも無いですよ」

「本当に大丈夫？」ないだのの任務の時も突然ぼーっとしてたし……

「大丈夫ですよ。少し考え方をしてただけです」

「でも、無理はよくないよ？」

「え……？」

少年の言葉に返事を返したのはフェイトではなかつた。だが、声だけで少年はその人が誰だかわかつた。

「2人とも何はなしてるの？」

こないだのカフェと同じように彼女はフェイトの隣に立つ。違うといえば来ている服と立つか座るかである。

「あ、なのは。久しぶり……って程でも無いね」

「来たか……まあ、来るとは思つてたけどもう少しパーティーを楽しめたかったな……」

「あの、なのはさん」

「ひー?...どうかしたの?」

「...少しだけ外で話したい事があるんですけど」

「じゃあ外に行こうか」

そういうと少年の手を握る

「ごめんねフエイトちゃん。今は彼と話していくよ」

「うん。待ってるから終わったら話しがけて」

それだけ言うとのははフエイトに軽く手を振りながら少年と一緒に外へと向かった。

「嬉しいなー六課が解散して以来君に名前を呼ばれた事が無かつたのに」「やつぱり名前で読んでくれると嬉しいよ」

なのはと少年はパーティーが始まるまで少年がいた公園のベンチに座っている。座りながらもなのはは少年の手を握り締めており少年はそれに対しても反応しない。

「それで話つて何かな?」

名前で呼ばれたのが嬉しいのか頬を紅く染め、嬉しそうに笑いながらなのはは少年の顔を見つめる。

その田はカフエであつたときは違つて光があり濁りなどない綺麗な田であり、前と同じように少年の田を見つめる。

… そりなんだ。 じつから近づけば変な事をしないんだ。
きっと今から俺がする」ことは逃げる」ことになるんだろう。
でも、それでいい。
俺が逃げれば、何も起きないんだから…

「 なのはさん、好きです」

少年の告白になのはは田を見開き驚く。

「え…? 今好きって言つた…?」

「はい、好きです。大好きですーーー」

「ほ、本当に? 嘘じゃないよね?」

「 嘘なんかじゃないです。俺は貴方が大好きなんです」「
嘘なんかじゃないわ。

俺の事を大好きと言つてくれる人を嫌いなはずなんて無い。
ウソナンカジヤナイ

「 私もだよ、君のことが大好き」

そう言いながらなのはは少年に力強く抱き付く。

「 もう放さないよ。誰にも渡さない。私達は恋人同士だもん」「
だから君は誰にも渡さないし、私以外の女と仲良くしちゃ駄目だ
よ」

「 もし君が居なくなれば私、どうなるか私でも解らないんだから」

少年と顔を合わせながらなのはは言つ。
少しだけ濁つた目で少年を見つめながら。

「ええ、貴方を裏切りませんよなのはさん」

「駄目だよ。なのはつて呼んで」「
それに敬語禁止だよ」

「…ああ、わかつたよ。なのは」

少年はそう言つとなのはに顔を近付ける。

なのはもその意味に気付いたのか目を閉じて顔を少年に近付ける。

2人はそのままキスをする。

なのはは大好きな人と結ばれた事を確認するために。
少年は自分が逃げたことを理解するために。

…これでいいんだ。

なのはさんみたいた美人の恋人になれるんだ。

悪い話じや無いじやないか。

俺にデメリットなんて無いじやないか。

…ごめん、ティアナ

なのはが少年から離れるとそのままパーティー会場の方を向き、少年の手を握る。

「ほり、パーティーに戻つて皆に報告しよ
「なのはが歩き出す。

それに合わせるように少年も歩き出す。

2人でゆっくりとパーティー会場へと向けて歩いて行つた。

あれからのこと、つまり俺が告白したあの事について軽く話そつ。まず、パーティー会場では俺となのはさんが部屋に入つたら皆が拍手をして歓迎してくれた。

俺は何もわからずに呆然としていたがなのはさんはわかっていたのか俺に軽く説明してくれた。

どうやら、はやてさんに頼んでおいたらしい。

おそらくだがパーティーの時にはやてさんと話していたのはこの何だろ。ひ。

このパーティーが始まる前から…いや、もしかしたらカフュで会つた時から彼女はこうなることがわかつていたのかも知れない。

…まあ、どうでもいいけど

後、拍手をしてくれている人達の中にはティアナとスバルは居なかつた。

後日聞いた話によると、はやてさんからの話を聞いた時にティアナが出ていき、それを追いかけるようにスバルも出ていったらしい。パーティーが終わり、そのままそれぞれの場所へと帰つた次の日俺に1通のメールが届いた。

なのはさんからのメールで内容は一緒に住もうという話だ。

俺はそれに賛成の言葉を送りそのまま仕事場へと向かった。

部隊長に会い初めに言われたのは違う課に配属になったといつ一言だけで、自分の机の上には封筒が置いてあった。

まあ、新しい課というのはなのはさんがいる処であり仕事内容もなのはさんのサポートというものがいるのだ。

これで俺は家でも仕事でも大好きななのはさんと一緒にいることが出来るのだ。

…全然嬉しくない
いや、そんなはずない
ソンナハズナイ

変えてほしい。

でも、変えてはダメだ。

俺は逃げたから…

逃げたんだから…

だからしょうがないんだ

あれにはびつすることができないから

終わった

さて、早速ですが言い訳をさせてください

この短編を書き始めたねが前作でもある病みつきなのはを投稿して1週間ほどたつた日ですがフェイトと少年がカフェに行つたあたりからは8月に書いてあります。

…まあ、テストとかいろいろあつたし…ね?

まあ、とにかく書き終わりましたといいですよ…ね?

で、さてと詳しこことは活動報告を見てくださいわからんと思いますが、連載を書くかどうか悩んでます。

まあ、病みつきシリーズもまだまだ書くつもりですけど

さてと、後書きひとつこんなものでいいのかな?

まあ、いいや

感想など書いてくれると嬉しいです!――

病みつきシリーズのキャラのリクエストも募集しております

なのはキャラじやなくともいいですよ

出来ればめだかボックス希望！！

では、また何かの縁があればまた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5451v/>

病みつきなのは～後日談～

2011年9月15日20時46分発行